開高健「パニック」論

―〈大衆〉のエネルギー―

松田浩明

一九五七年、『新日本文学』の八月号に掲載された「パニック」によって、開高は文壇に登場し、作家としての出発を始めた。一九五六年、『近代文学』二月号に短編「円の破れ目」を発表してからおよそ一年半ぶりの創作である。本稿では、開高健の出世作となった「パニック」の解明を志す。

一

まずは、小説の概略を示す。

「パニック」は、四つの部分からなりたっており、各部分の冒頭には、それぞれ漢数字の「一」から「四」の数字がふられている。

この小説の語り手は、役所の「山林課」に勤める主人公「俊介」による、三人称客観の視点をもつ。

「一」は、「熱い悪臭」がただよう、役所の「飼育室」の場面から始まる。イタチの実験を見せるようにと「山林課」の「課長」に求められ、課員の「俊介」が、彼を「飼育室」に連れてきたのである。飢えたイタチが、一瞬のうちに五匹のネズミを皆殺しにする現場を見たあと、二人は課の「部屋」に戻り、鼠害問題についての会話を交わす。手遅れにならないうちにと、「俊介」はやんわり提言するが、「課長」は全く聞き入れず、春が来ればイタチでも放しておけばいいという。汚職の現場として悪名高い料亭「つた屋」に、「課長」が「局長専用の自動車」で出掛けた後、彼は「一年ぶり」で手元にもどされた鼠害予測の「企画書」を、机にたたきつける。

「二」は、鼠害をめぐる科学的な記述で始まる。「去年の秋、「この地方」で「きっちり一二〇年ぶりに」「ササがいっせいに花をひらいて実をむすんだ」。「小麦とおなじほどの栄養価がある」ササの実をめざして「あらゆる種類の野ネズミ」が集まった。「地底に王国を築」いたネズミたちは、冬ごもりの間に子を産み続け、蓄えていたササの実を食いつくし、やがて「飢えて見境がつかなく」なるだろう。春の雪解けとともに「恐慌」が発生することは間違いがない。このことは、「研究課の学者や技術官たち」がすでに去年の春に予測をたて、警告していたことである。山歩きの体験を通じて来春の恐慌を確信した「俊介」は、危機の防止に手をつくすが、その言動は、「お先走りな空想家」のそれとして、全く相手にされなかった。

「三」は、イタチの実験（「一」）から「二ヶ月ほど」経過した「ある日」、「課長」に呼ばれた「俊介」が、「あちらこちら穴があいて、ぼろぼろにになった風呂敷」を見せられるところから始まる。それは、弁当を包んでいた「木こり」の風呂敷で、大量のネズミに食い

破られたのだという。その後「十日」もたたずに「山林課」は、鼠害の対応で「にっちもさっちもならなく」なり、「ついに専任の鼠害対策委員会を設ける」に至る。「日頃の職務をとかれ」た「俊介」は、そこで「ネズミと全面的に取組むことを命じ」られる。彼は、企画書の却下以来「一年ちかい月日の間」、ひそかに練り続けてきた対策を、精力的に次々と実行に移す。しかし、予想を越えたネズミの「エネルギー」を前に、その効果はなく、鼠害は拡がる一方である。

「四」は、鼠害の悪化から始まる。「俊介」は、大衆を動員してネズミに抗するが、ネズミたちは「日ましに兇暴となって餌をもとめ」るばかりである。悪化の一途をたどる鼠害に、やがて町には「伝染病の噂」が流れはじめる。「自然現象」のパニックが「心理現象」のパニックへと発展してゆくのである。町に恐怖が広まるや、すぐさまそれに飛びついたのが、「落選した進歩政党の県会議員」であった。「心理現象」のパニックは、「政治現象」のパニックにも発展してゆく。「弾劾と鼠害がほぼ絶頂に達したかと思われる頃」の「ある日」、彼は、料亭「つた屋」で「局長」から、鼠害はもうないという嘘の「終戦宣言」をするよう命じられ、そして、「東京の本庁へ栄転」という「知事」の指令も伝えられる。「泥酔し」た彼が家に帰ると、「研究課」の「農学者」が待ちわびていた。聞けば、ネズミが湖の方向を目指して集団移動を始めたという。タクシーで湖に直行した彼らは、そこで、大量のネズミが延々と集団入水を続ける現場に立ち会うことになる。その様子を充分見た後、明け方二人は帰途につく。

以上がこの小説の概略である。

ところで、この「パニック」はこれまで、ネズミの集団について複数の読みが提示されてきた。その解釈を分類すれば、大きく二つの型にわけることができる。

第一の型は、ネズミの集団に〈動物的エネルギー〉を読みとるというものである。この解釈は、オーソドックスな読みといえるもので、ここでは特に問題としない。

問題としたいのは、第二の型の解釈である。それは、ネズミの集団に人間の集団のイメージを重ね合わせる寓意の解釈である。この解釈は、人間の集団のどのような営為をイメージするかによって、さらにいくつかの解釈に分かれる。

複数の論者がとりあげている代表的なものとしては、ネズミの集団に〈大衆のエネルギー〉を読みとる解釈がある。ここでいう〈大衆〉とは、政治的な争乱の際に主体となる不特定多数の一般民衆、という程度の意味である。

この解釈は、江藤淳が、「この小動物の大群に対する作者の屈折した視線—これはこの作家に特徴的なものであるが—の彼方には、たとえばはけ口をあたえられた盲目的な民衆のエネルギーのようなものに対する共感がかくされているといってもよい」と指摘[8]して以後、複数の論者に踏襲され、ほぼ定説となった観がある。

しかし、そもそもその解釈は、いったい何を根拠にして成立するのか。その根拠の一部をうかがうことのできる、平野謙の論[9]を次に見る。

『パニック』の主人公は誰かといえば、五万町歩もあろうかという広大な山林に発生した巨大な鼠の群というしかない。一匹

一匹をとってみれば、文字どおりとるにたらぬ臆病な小動物のかもす集団としての無目的的なエネルギイの噴出が、まずこの小説の主人公たることは明らかだ。しかし、それは単なる動物的エネルギイではない。たとえば安保反対闘争に際して、ひとりひとりのかよわい市民が、あつまりあつまって巨大なエネルギイを発揮したときのような一象徴として、それは措定されている。

ここに示唆されている、解釈の根拠は、二つある。

一つは、作品発表時の時代背景である。「パニック」発表当時にはまだ「安保反対闘争」は起こっていなかったので、ネズミの集団に、「安保反対闘争」に参加する「ひとりひとりのかよわい市民」を読み取ることは無理である。この文章が発表されたのは、一九六二年であるので、おそらく平野は、政治的争乱の分かりやすい例として「安保反対闘争」を挙げたのであろう。「パニック」を文芸時評で激賞し[9]、開高を文壇に押し上げたのは平野であったが、その平野が「パニック」の発表年次を間違えて記憶しているとは思えない。しかし、平野は、単にわかりやすい例としてだけ「安保反対闘争」を挙げたのだろうか。おそらく、そうではない。

開高が「パニック」の着想を得たのは、一九五七年二月八日に発行された朝日新聞の記事であったが、それから「パニック」が掲載された『新日本文学』八月号が発売されるまでの数ヶ月間を中心とした政治の動向を概観してみると、次のようである。まず、一月三一日は、病に臥した石橋首相が岸信介外相に臨時首相代理を任命。二月二三日に、石橋内閣は総辞職。三月二一日の自民党の党大会で岸信介は総裁に選出されている。四月二五日の参議院で、攻撃的核保有は違憲との政府の統一見解が発表されたが、五月七日の参議院において、岸首相は自衛としての核保有は可能と答弁している。五月二〇日、岸信介は、東南アジア六カ国訪問に出発。そして、日米安保委員会の設置を日米の共同声明として発表したのは六月二一日である。

先の平野の、「安保反対闘争」に参加する「ひとりひとりのかよわい市民」という解釈は、のちの「安保反対闘争」につながるような政府に対する警戒感や反感が、「パニック」発表当時すでに気分としてあったことを想起してのことではなかったろうか。特にこのことを裏付けるような平野の言葉があるわけではなく、また、このことに関する開高の言葉があるわけでもないので、以上のことはあくまで仮説に過ぎない。しかし、この仮説を裏付けるような内容を「パニック」は備えている。このことは後に詳しく見ていく。

平野謙が、ネズミの集団に〈大衆のエネルギー〉を読み取る際にもう一つ根拠としていたのは、作品内の言葉である。先に示した引用において、平野は、「一匹一匹をとってみれば、文字どおりとるにたらぬ臆病な小動物のかもす集団としての無目的的なエネルギイの噴出」に、「ひとりひとりのかよわい市民が、あつまりあつまって巨大なエネルギイを発揮」するイメージを重ねていたが、このことを可能にする記述が、作品の「二」にある。

ところが、これほど臆病で神経質なネズミでも、いったん集団

に編入されたとなると、性質はまったく変ってしまうのである。集団のエネルギーは暗く巨大で、狂的でもあれば発作的でもある。（二一）

集団のどんな生理が個体の内容を変えてしまうのか。（二一）

ネズミのことを語っているとも、人間のことを語っているとも、どちらともとれるように書かれた、これらの記述が、ネズミの集団に人間の集団のイメージを重ねる解釈を可能にしていることは確実である。ネズミの集団に〈大衆のエネルギー〉を読み取る平野謙の解釈は、「二」のこれらの記述と、作品発表時の時代背景に関する知識とを重ね合わせたところに成立している。

以上、解釈の根拠を比較的よく示している平野謙の説を対象にして、〈大衆のエネルギー〉という寓意の解釈について見てきた。

ネズミの集団に人間の集団のイメージを読み取る寓意の解釈としては、他には例えば、「このネズミはたとえばサイパンの集団自殺」であるとする開高の説[6]がある。あるいは、「この笹の実によるネズミの異常な繁殖と自滅とが、そのまま資本主義社会の大恐慌を、またヒットラー的ファシズムの熱狂と破滅を暗喩している」とする奥野健男の説[6]もある。

いったい、どの解釈が適当なものといえるのだろうか。

結論めいたことを先に述べれば、ネズミの集団に人間の集団を読み取る解釈は、〈大衆のエネルギー〉という解釈がもっとも妥当なものであり、それ以外の寓意の解釈は、かなり成り立ちにくいのではないかと思われるのである。私は以下に、ネズミの集団に人間の集団のイメージを読み取るに際して、〈大衆のエネルギー〉という解釈を採用することがかなりの程度必然的であることを、平野謙の説を踏まえながらも、また別の角度から論じてみようと思う。

二

これまで「パニック」は、主人公「俊介」のネズミ退治、そして、その「俊介」を介して見た「ネズミの集団」にかかわる様々の「寓意」について、論じられてきた。しかし、私はそれだけではなく、「俊介」に今一つの役割が託されていることを指摘し、考察を加えてみたい。すなわち、政治的争乱の火付け役としての「俊介」についてである。これは、心理的パニックが政治的パニックに移行した、「四」の前半に描かれているものである。

飢えにせまられたネズミたちは、「日ましに兇暴」となっていく。「ネズミ狩りの布告がいつまでたっても取消されないばかりか」、鼠害を警告する「ビラ」や「ポスター」は、次々と登場するばかりである。そんな「険悪」な「空気」のなか、「ひとびとは怪しげな噂をささやき」はじめる。「伝染病の噂」である。そして、「一夜で藁屋根を丸裸かにされた農家とネズミに食い殺された幼児の記事」が新聞にでるや、人々の間には「中世の暗黒都市の住人が抱いたのとおなじ」性質の「内的なパニック」が急速に広がる。

そんななか、「どこから探りだしたのか」、進歩政党の党員の一人が、「俊介の家へ上申書ボイコット事件のいきさつを聞きにやって来」

る。「俊介」は「ただ彼の計画の内容と、ササの実とネズミの相関関係、それだけを説明したにすぎない」のだが、彼は、「入れられざる預言者、俗物に葬られた英雄、そして積極的良心の象徴」として、「革命」をその最終目標に据えた体制批判の最大のポイントにまつりあげられる。彼は自分が「激越な讃辞の渦にまきこまれていることを知っていたたまれ」なく感じる。しかし、賞賛の対象となることには「いたたまれ」なく思っても、体制批判の最大のポイントに立ったことについて、彼は決して「いたたまれ」なくは思っていない。むしろ、そのポイントに立った自分に、彼がある可能性を見いだしているところもある。それは、次の引用に見ることができる。

町角や小学校でひらかれる弾劾演説会は日を追ってはげしくなり数を増した。そしてどの会場も伝染病の心理的パニックにおそわれた聴衆で党派を問わず満員であった。演説者もその盛況ぶりに勇気を得たのか、はじめのうちはただ県政の腐敗追及だけにとどめていた主張をたちまち知事のリコール運動に切りかえたのである。町の電柱や壁や告示板には感嘆符が飾りたてられ、いくつかの新しい人名が氾濫した。そして町が寝静まってからでも革命を要求する若い、はげしい声が辻から辻へ走りまわり、ネズミや細菌とともにひとびとの夢のなかへ侵入していくのだった。放送局に俊介が招かれた夜も一人の青年がスクーターにのって夜の舗道を走っていたが、その声は無人の街路にするどくこだまし、俊介に発声者の清潔な肉体を想像させた。鼠害解説の深夜録音をとるために階段をのぼる彼をその声は壁ごしにどこまでも追って来てはなれなかった。（「四」）

まずおさえておきたいのは、「革命を要求する若い、はげしい声」が、「ひとびとの夢のなかへ侵入していくのだった」ということで、政治的な争乱の可能性が準備されつつあるという状況が、一つの事実として語られていることである。

次いでおさえておきたいのは、彼が、「その声」を発している「一人の青年」に、「清潔な肉体を想像」しているということである。北野昭彦氏の指摘するように、「俊介」が、「革命を要求する若い声に心情的な共感をおぼえ」ていることは明らかであり、ここに、政治的な争乱に対する彼の肯定的な感情を読み取ることができよう。

第三におさえておきたいのは、「革命を要求する若い、はげしい声」が、彼を「どこまでも追って来てはなれなかった」ということである。「青年」は、「放送局」の近くで動かずにいるのではなく、「スクーター」で町中を走りながら「その声」を発しているのであり、「どこまでも追って来てはなれなかった」ということは、現実では普通はない。にもかかわらず、「どこまでも追って来てはなれなかった」とあるのは、現実的なものではなく、明らかに、「俊介」の心理的、感覚的なものである。では、そのような心理状態はどこからくるのか。それは、「鼠害解説」の「深夜録音をとる」ために、彼が「放送局」に来ているということに由来する。政治的な争乱が、大きな可能性をもちつつあるこの時期に、彼が行う「鼠害解説」が公共の電波にのればどうなるか。かつて、進歩政党の党員の一人が「上申書ボイコット事件」を聞きに来たとき、彼は「計画の内容と、ササの

実とネズミの相関関係」を「説明したにすぎない」のに、政治的なパニックが加速したということがあった。この上、更に、彼の「鼠害解説」が電波にのれば、争乱の勃発はより現実に近いものになるであろう。町中を走る「スクーター」から発せられた「革命を要求する若い、はげしい声」が、「どこまでも追って来てはなれな」いものと感じられたのは、自分がこれからなそうとする行為がどういう結果を生むかを、自覚、期待していたがゆえである。

以上をまとめると、次のようになる。まず、政治的な争乱の可能性が確実に準備されつつあるという状況が語られていた。次いで、「俊介」は、その可能性を高める行為に、肯定的な感情を抱いていた。そして、彼は、争乱の勃発に火をつけるであろう「鼠害解説」の「深夜録音」を、その効果を自覚、期待しながら行おうとしていた。あとは、その録音が放送されるのを待つだけである。

しかし、事態は、おもわぬ展開をした。

「弾劾と鼠害がほぼ絶頂に達したかと思われる頃」の「ある日」、「俊介」は「課長」に誘われ料亭「つた屋」に行く。二人で「世間話をさかなに酒を飲んでい」ると、「そこへ局長が仲居に案内されて何の予告もなく」入って来た。なぜ「こんな卑屈な取引場」に「局長」が来たのか、「しばらく見当がつかなかった」が、話を聞いてみると、「局長」は、今度のネズミ騒動の責任が自分の「ミス」であったと認め、「すべて自分の責任に帰そうとしている」のである。「俊介」はそんな「局長」に「一種の清潔さを感じ」る。しかしそれも最初のうちだけで、やがて「局長」は、それまでの「いんぎんで気さくな」口調から「にわかに実務家の口調」に変わって、劇薬の殺鼠剤「一〇八〇」をばらまいたのち、鼠害対策委員会を解散すると言い出した。つまり、ネズミはもういないことにすると言うのである。さらに、あろうことか、「局長」はその「終戦宣言」を「俊介」に命じる。

「いいかい。きみは一〇八〇を県下一円にばらまくんだ。それからラジオで放送する。新聞には談話と記事だね。つまりこれは終戦宣言だ。ご諒解願えるでしょうな」(「四」)

「局長」が、それをわざわざ「俊介」に命じたのは、進歩政党の勢力をそぐためである。体制批判の重要なポイントにたっている「俊介」が「終戦宣言」をすれば、ぎりぎりまで煮詰まっている政治的パニックがおさまるからである。

この小説では、マスメディアが政治的な武器として機能するということが、効果的に扱われている。先程の、争乱が勃発することを自覚、期待しながら、「ラジオ」の「深夜録音」をした立場と、ここでの、〈大衆のエネルギー〉を沈下させる「終戦宣言」を、「ラジオ」と「新聞」で発表する立場とは、明らかに対照的である。

それでも、「深夜録音」した「俊介」の声が先に流れれば、争乱の可能性はまだまだ残るが、しかし、それは決定的につぶされる。

「こないだ君はラジオにでたね。ニュース解説の深夜録音をとったろう?あれは放送局から問合わせの電話があったので放送延期を頼んでおいたよ。みんなネズミのことには過敏になって

いるからな、もし君の放送が誤解されるとデマはひろがる一方だ。ネズミをはびこらせてしまったのはこちらの手落ちだが、大衆をデマにまきこむことだけは防がねばならない。君の原稿の内容は伝染病に直接の関係はないが、刺激にはなる。想像力は野放しにしておくと際限なくひろがるからね、どんなことをでっちあげられるかわからない。これが危険なんだ」（四）

ここに至って、争乱の火付け役としての立場と、争乱そのものへの期待は、消えてしまった。

少しまとめてみる。

心理的パニックから発展した政治的パニックの場面において、「俊介」は巻き込まれるかたちではあるが、体制批判の最大のポイントに立った。そして、政治的パニックが煮詰まってゆき、争乱がいよいよ現実的な可能性をおびてきた時、彼は、その効果を自覚、期待しながら、「放送局」で「深夜録音」を行った。つまり、争乱の火付け役となりかけたのである。しかし、その録音はにぎりつぶされてしまい、火付け役としての立場も、その立場に基づいた争乱への期待も、失われてしまった。ちなみにこのときの喪失感は、後のクライマックスの場面において、より決定的なものとなって「俊介」のなかに甦り、作品解釈の上で大きなポイントとなる。

「つた屋」から「はじしらずに泥酔して帰った俊介」を待ちわびていたのは、「研究課」の「農学者」であった。「農学者」は「酔いしびれた俊介」を、「エンジンをかけっぱなしにして」待たせていたタクシーに押し込み、暴走を始めたネズミの集団を追う。「夜明けちかくになってやっと湖についたとき、彼らは過去一年四ヶ月にわたって追いつ追われつしていたエネルギーの行方をついに発見することができた」。そこで「俊介」が「直面」したのは、「奇怪な規律」に従って「無数のネズミが先を争って水にとびこ」み続けるという、「異様な生命現象」であった。眼前で展開されている、「まったく不可解」な「力」の「濫費」に、「俊介」は「巨大で新鮮な無力感」を味わう。

俊介は服の襟をたてると寒さしのぎに砂のうえをせかせかと歩きまわった。暁の湖岸の微風はナイフのようにするどかった。新聞にはこの光景が劇的に書きたてられるだろう。風の向きでどちらの岸になるかわからないが、いずれネズミの死体は岸へ打ちあげられて山積みになるのだ。局長はだまってダンヒルをくゆらせ、地下組織壊滅の知らせをトスカニーニとともに聞くだろう。ひとびとは細菌と革命を忘れ、地主たちは植栽補助金争奪戦にのりだし、課長は新しい汚職を考え、そして田舎町はふたたび円周をめぐるような平安な生活にもどるのだ。このパニックの原動力が水中に消えるとともに政治と心理のパニックもまたひとびとの意識の底ふかくもぐってしまうのではないだろうか。深夜の町の若い声はひとびとの夢のなかへ入っていけるだろうか……（「四」）

このパラグラフの前半では、「俊介」の確信が語られている。彼はまず、「ネズミの死体は岸へ打ちあげられて山積みになるのだ」と、

ネズミの集団が消滅することを確信する。そしてその結果、彼をとりまく世界が、「円周をめぐるような平安な生活」という日常的な秩序を、再び回復するであろうことをも確信する。

次に、これらの確信をもとに「俊介」の意識は、ある哀惜の念に移行していく。それが、このパラグラフの後半で語られている。「俊介」は、「このパニックの原動力」が消滅することによって、「政治と心理のパニックもまたひとびとの意識の底ふかくもぐってしまうのではないだろうか」と、人心がおちついてしまうことを哀しむ。ここで注意しておきたいのは、事件の展開に即して「心理と政治のパニック」と言わずに、「政治と心理のパニック」と語られていることである。大した違いはないようであるが、ここには、「政治」のパニックに重きを置く「俊介」の内面が示唆されているように思える。この叙述の転倒に、本当に大した違いがないかどうかは、次の一文の解釈にかかってくるのではないだろうか。

それは、「深夜の町の若い声はひとびとの夢のなかへ入っていけるだろうか……」という一文である。すでにおさえておいたことだが、「深夜の町の若い声」というのは、「進歩政党」を支持する「青年」の、「革命を要求する若い、はげしい声」のことである。

かつて、政治的パニックが「ほぼ絶頂」に達した際、「俊介」は争乱の火付け役としての自分を意識し、その自分の手によってなされる争乱の実現を期待しつつ、「鼠害解説」の「深夜録音」を行った。その時の彼にとって、「革命を要求する若い、はげしい声」は、「どこまでも追ってきてはなれない」ものとしてとらえられていた。しかし結局、「俊介」の「鼠害解説」は握りつぶされてしまった。

「深夜の町の若い声はひとびとの夢のなかへ入っていけるだろうか……」という「俊介」の心内語の意味するところは何であろうか。それは、「パニックの原動力」が目の前で湖に消えていくという、決定的な争乱消失の現実を前にしてわきあがってきた、かつての、自分が火付け役となってひきおこすはずであった争乱に対する哀惜の念であろう。

俊介は足もとを必死になって走ってゆく灰色の群集を眺めて、うしろの農学者に声をかけた。農学者はよれよれのレインコートの襟をたて、うそ寒そうな表情で肩をすくめていた。

「これからどうなるんでしょう?」

「もう終ったよ。あちらこちらで残りの奴がおなじように逃げだすかも知れないが、事実は終ったも同然さ」

「町にはドブネズミがいますよ」

「たかが知れてる。あいつらは下水管に陸（ランド・ドック）封されたようなもんだからね。一匹ずつシラミつぶしにやっつけていけばいいのさ」（一四）

これまで「パニック」のクライマックスの場面を問題とする際、この引用以前の箇所ばかりが取り上げられてきたが、重要であることは、このパラグラフも同様である。とりわけ重要なのは、ネズミの集団を「灰色の群集」と形容している一文であろう。ネズミにも人間にもあてはまる「群集」という語は、作品解釈の決め手となるように思われる。

「足元を必死になって走ってゆく灰色の群集」を眺める「俊介」の眼に、自分が火付け役となっての争乱で蜂起するはずであった〈大衆〉のイメージが写っていることは、これまで押さえてきたところから、明らかであろう。しかもこの時、「灰色の群集」を上から眺める「俊介」の視線は、〈大衆〉の自壊を手をこまねいて眺めるしかない無力な〈知識人〉の視線としても成立している。したがって、「これからどうなるんでしょう?」、「町にはドブネズミがいますよ」、と言う「俊介」と、それに冷静な答えを返す「農学者」とのやりとりには微妙なズレがある。「農学者」には、ネズミの集団を〈大衆〉ととらえる眼は存していないからである。

以上から、ネズミの集団に人間の集団のイメージを読み取る解釈としては、〈大衆のエネルギー〉という解釈がもっとも妥当なものであることが明らかになったとおもう。主人公「俊介」の存在を考慮にいれれば、他の人間の集団をイメージしようとする解釈は、成り立ちにくいのではないだろうか。

「パニック」による文壇デビュー以後、ほぼ一〇年間、開高は、政治的な世界に関心を寄せ続けたが、その問題意識の萌芽が、この「パニック」に認められるようである。これ以後の作品において、作者の政治的な姿勢が、どのように移り変わっていったのか、綿密な検討が望まれる。

《注》

①本文の引用は、『開高健全集』第一巻（一九九一・一一　新潮社）による。

②江藤淳「新しい作家達」（一九五八・二　『群像』）

③平野謙「開高健・大江健三郎」（『新日本文学全集⑪〈開高健・大江健三郎集〉』（一九六二・一〇　集英社）

④平野謙「今月の小説ベスト3」（一九五七・七・一九　『毎日新聞』）

⑤開高健「抽象化への方向」（一九五八・二　『文章クラブ』）

⑥奥野健男「解説」（『昭和文学全集　第二九巻〈開高健・大江健三郎〉』　一九六三・六　角川書店）

⑦北野昭彦「開高健『パニック』管見―〈集団的自我〉の行くえと〈倦怠感〉―」（一九八一・三　『園田国文』）

《付記》

引用に際し、旧字体は新字体に、旧カナ遣いは新カナ遣いに改めた。

（まつだ　ひろあき）